

# 高校生・大学生が考える未来の博物館構想事業について

中沢 秀一<sup>1)</sup>・伊丸岡 政彦<sup>2)</sup>

Project on High School and College Students'  
Vision for Future Museums  
NAKASAWA Syuichi and IMARUOKA Masahiko

キーワード：高校生 大学生 未来の博物館構想 マインドマップ

## はじめに

青森県立郷土館は、建物の耐震診断結果を踏まえ、令和2年10月より休館しており、現在は他施設を活用した館外事業を中心に活動を継続している。このため、県内外からの団体観覧者の受け入れが困難となり、郷土の文化や自然、歴史等を直接的に伝える機会が大きく制限されている状況にある。

一方で、新たな県立博物館の整備に向け、次世代に向けた博物館のあり方について検討が行われた。そこで本研究では、博物館利用者であると同時に、博物館活動の担い手となり得る高校生および大学生達から未来の博物館像や学芸員の役割について参考意見を聴取することとした。

具体的には、弘前大学において学芸員養成課程を履修する学生および修了した大学院生、ならびに将来博物館職員・学芸員としての進路に関心をもつ青森県立青森南高等学校の高校生を対象に、「これからの青森県立の博物館に望まれるものとは何か」をテーマとしたワークショップ形式の講義・意見交換を実施した。本稿では、その成果を整理し、博物館法が規定する博物館および学芸員の役割との関係を踏まえつつ、新たな県立博物館構想に資する基礎的資料とを提示したい。

なお、本事業の実施にあたり、多大なるご協力とご助言を賜り、資料の提供および使用をご許可いただいた弘前大学、青森県立青森南高等学校をはじめとする関係者各位、ならびに事業運営に携わった当館職員に対し、ここに記して深く感謝の意を表す。



写真1 授業の様子①



写真2 授業の様子②



写真3 授業の様子③

(いずれも青森県立青森南高等学校において)

## 1. 高校生の考える博物館構想に向けて

当館は、令和2年10月から休館が続いており、現在の高校生および大学生世代にとって、当館を実際に観覧する機会は極めて限られた。このため、当館に対する認知度は必ずしも高いとは言えない状況にある。

当館ではこれまで、県内の小学校・中学校・高等学校を対象とした出前授業や、小学生向けの教育普及事業である「夏休みこどものくに」「冬休みめぐりまわし大会」、さらには「移動博物館」などの館外活動を実施してきた。しかし、休館期間中においては、これらの事業への参加経験をもたない生徒が大半を占めている。また、令和3年度以降は大学生を対象とした博物館実習の受け入れも実施できない状況が継続しており、次世代への博物館理解を深める機会が十分に確保されているとは言い難い。

こうした現状を踏まえ、本事業では、青森県立青森南高等学校の協力を得て、博物館に関心をもつ生徒や、将来の進路として学芸員を志望する1年生から3年生までの生徒を対象に、博物館の基本的機能や学芸員の役割について、講義および実習を組み合わせたプログラムを実施した。

1) 青森県立郷土館主任研究主査 (〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

2) 青森県立郷土館主任学芸主査 (同)

本稿では、高校生が博物館についてどのように理解し、どのような博物館像を描いたのかを整理するため、参加生徒が実践した博物館指導計画をもとに、その内容と特徴について述べる。

## 2. 高校生の実態

高校生の実態については、前章でも触れたとおり、青森県立郷土館が令和2年10月から休館している影響が大きい。参加した生徒の多くは、当館が県立の博物館であることを十分に認識しておらず、当館が実施してきた教育普及活動についても、具体的な内容を把握していない状況であった。

また、当館を実際に訪れ、常設展示を観覧した経験や、企画展・特別展を観覧した経験をもつ生徒はほとんど見られなかった。

一方で、参加した生徒はいずれも博物館活動に対する関心が高く、将来、博物館職員や学芸員として働くことを進路の選択肢として真剣に考えている点が特徴的であった。

## 3. 高校生が実践した博物館学指導計画

表1 博物館学指導計画

| 回数・日時                          | 指導項目  | ねらい   |
|--------------------------------|---|---|
| 第1回<br>7月2日(水)<br>15:30～16:20  | 「博物館の機能学芸員の仕事を知る」   | 博物館の基本的機能や学芸員の仕事に関する知識を身につけることで、博物館への理解を深め、郷土への関心を高める。                                      |
| 第2回<br>7月9日(水)<br>15:30～16:20  | 「学芸員の仕事を体験する」(例) 掛け軸、梱包編、はく製展示編 広報編(ショート動画など) など  | 掛け軸の取扱い、資料梱包、はく製展示、広報(ショート動画制作等)を通して、資料保存・展示・広報に関する学芸員業務への理解を深める。                           |
| 第3回<br>7月23日(水)<br>13:00～14:00 | 「未来の博物館を考えよう」<br>(ワークショップ形式)<br>これまでに学んだ博物館の知識や学芸員業務の体験をもとに、若い世代に受け入れられる新しい博物館像について意見を出す。<br>[手法]①ブレインストーミング②KJ法③マインドマップ作成する。 | 今まで学んだ博物館の知識や学芸員の実践体験を通して、郷土愛に満ち、若い世代を中心に受け入れられる新しい博物館構想の考えや意見を出し、グループワークを通してまとめ発表することができる。 |
| 第4回<br>7月24日(木)<br>13:00～14:00 | 「未来の博物館を考えよう」<br>グループワークを通して意見を整理し、博物館構想としてまとめ、発表・共有する。   |   |

本指導計画は、表1に示すとおり全4回で構成し、博物館の基礎的理解から学芸員業務の体験、さらに未来の博物館像を考えるワークショップへと段階的に展開した。

第1回および第2回では、博物館の役割や博物館法に基づく学芸員の業務内容について講義と実習を通して学ぶ機会を設けた。特に第2回では、実際の学芸員業務を想定した資料の取扱いや展示、広報活動を体験することで、博物館運営の具体像を理解することを目的とした。

第3回および第4回では、これまでの学習内容を踏まえ、「未来の博物館」をテーマとしたワークショップを実施した。生徒はブレインストーミングやKJ法、マインドマップ作成を用いて意見を出し合い、最終的にグループごとに博物館構想としてまとめ、発表を行った。



写真4 掛け軸の実習①



写真5 掛け軸の実習②



写真6 掛け軸の実習③



写真7 掛け軸の実習④



写真8 グループ内覧会の様子①



写真9 グループ内覧会の様子②



写真10 グループ内覧会の様子③



写真11 グループ内覧会の様子④



写真12 グループ内覧会の様子⑤



写真13 マインドマップ作成の様子



写真14 マインドマップ作成の様子



写真15 マインドマップ作成の様子

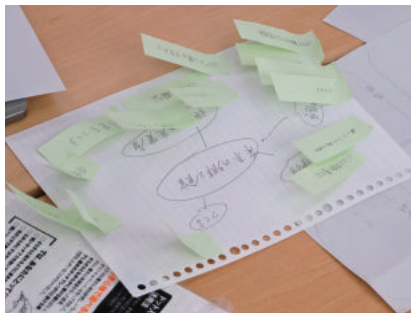


写真16 マインドマップ作成の様子



写真17 マインドマップ作成の様子



資料1 おすすめの一品  
QRコード

#### 4. 高校生が考えた未来の博物館マインドマップ作成と発表・感想からの考察

表2・3は、ワークショップ終了後に回収した感想文について、原文の資料性を保持するため原文抜粋を併記しつつ、内容に基づき区分および要旨を付したものである。これにより、実践の教育的効果、職業理解の深化、技能習得の過程および意識形成の状況について分析可能な基礎資料として整理した。区分は、「理解深化」「技能理解」「志望形成」「関心喚起」「価値認識」「協働理解」「職業理解」「技能習得」等の観点から分類したものであり、博物館教育実践の効果を多面的に検討するための分析枠組みとして設定したものである。

(1) 結果 表2・3を参照。

(2) 区分別集計結果

ワークショップ参加学生の感想文(第1回12名、第2回15名、計27名)について、内容分析に基づき区分別に整理した結果を表4に示す。

表2 第1回ワークショップ参加学生感想文整理表（資料編）

| No. | 学年 | 区分   | 要旨（分析用）                       | 原文抜粋（資料性確保）   |
|-----|----|------|-------------------------------|---|
| 1   | 2  | 志望形成 | 学芸員資格取得への志向と郷土館への関与意識の形成が示された | 「将来、学芸員の資格を取りたい…郷土館がより県民と郷土の繋がりを強くできるようなアイデアを考えようと思いました。」 |
| 2   | 3  | 関心喚起 | 郷土館への愛着と展示への関心の形成が示された        | 「話を聞いただけでもう愛着が湧いてきてしまう…他のも見たい。」                           |
| 3   | 3  | 理解深化 | 博物館の定義および学芸員制度に関する理解の深化が示された  | 「美術館や水族館も博物館に含まれることを初めて知りました。」                            |
| 4   | 2  | 理解深化 | 博物館機能および展示制作過程への理解の形成が示された    | 「展示を作る時に…学芸員が力を合わせて作り上げていることに驚いた。」                        |
| 5   | 1  | 理解深化 | 学芸員の協働による博物館運営への理解が示された       | 「学芸員の方々が協力することで成り立っていることがすごいと思いました。」                      |
| 6   | 1  | 価値認識 | 博物館および学芸員の社会的意義の認識が示された       | 「なくしてはいけないものなんだとわかりました。」                                  |
| 7   | 2  | 理解深化 | 博物館の多面的機能と学芸員の協働性への理解が示された    | 「資料の収集、保管…多くの人との共同作業が欠かせない。」                              |
| 8   | 3  | 理解深化 | 博物館の社会的役割および普及機能への理解が示された     | 「地域の名刺代わりのような施設だということがわかった。」                              |
| 9   | 3  | 志望形成 | 学芸員職への具体的進路イメージの形成が示された       | 自分がどうやって学芸員になるかをイメージしやすくなりました。」                           |
| 10  | 1  | 価値認識 | 郷土館の地域的重要性の認識が示された            | 「青森県にとって重要で不可欠なものだと知ることができた。」                             |
| 11  | 1  | 理解深化 | 郷土館の総合博物館としての役割への理解が示された      | 「県民と郷土を結ぶ総合博物館であることがわかった。」                                |
| 12  | 3  | 志望形成 | 学芸員職への志向の再形成が示された             | 「学芸員になりたいという考えも再燃してきた。」                                   |

表3 第2回ワークショップ参加学生感想文整理表（資料編）

| No. | 学年 | 区分   | 要旨（分析用）                    | 原文抜粋（資料性確保）                     |
|-----|----|------|----------------------------|---------------------------------|
| 1   | 3  | 技能理解 | 展示作業の技術的困難性と展示構成理解が示された    | 「巻いたり紐を結んだりする作業一つ一つを慎重に…必要がある。」 |
| 2   | 2  | 技能理解 | 資料取扱技術の難しさと展示鑑賞視点の変化が示された  | 「テーマにおかれているものが何なのかを考えて回りたい。」    |
| 3   | 1  | 技能習得 | 展示技術の実践的習得が示された            | 「矢筈を使って上手にかけることができた。」           |
| 4   | 2  | 技能理解 | 展示作業の困難性と展示紹介活動の教育的効果が示された | 「綺麗に収納するのが大変でした。」               |
| 5   | 3  | 協働理解 | 展示制作における協働の重要性の理解が示された     | 「グループで協力したり工夫することが大切。」          |
| 6   | 3  | 展示理解 | 展示構成の多様性の認識が示された           | 「机を動かすことだけでもみんな違って面白い。」         |
| 7   | 3  | 職業理解 | 学芸員業務の責任性と技能必要性の理解が示された    | 「緊張感を味わった。」                     |
| 8   | 3  | 体験効果 | 体験学習の有効性の認識が示された           | 「見るのとやるのは全然違う。」                 |
| 9   | 1  | 価値認識 | 展示の背景にある職員の努力への理解が示された     | 「大切にものを扱い、丁寧に掛けていることがわかりました。」   |
| 10  | 1  | 職業理解 | 学芸員の責任とやりがいの理解が示された        | 「責任感や情熱が非常に重要。」                 |
| 11  | 3  | 職業理解 | 文化財取扱における職業倫理の理解が示された      | 「文化財に対する愛と情熱があつてこそ成立。」          |
| 12  | 1  | 展示理解 | 展示構成による伝達効果の理解が示された        | 「配置の工夫や説明が加わるとより良さが伝わった。」       |
| 13  | 1  | 技能理解 | 展示技術習得の困難性の認識が示された         | 「しっかり掛けれるようになるには結構時間がかかる。」      |
| 14  | 2  | 技能理解 | 資料取扱技術の習得過程への理解が示された       | 「自分でやるととてもコツが必要。」               |
| 15  | 2  | 技能習得 | 展示技能の習得と展示活動への主体的参加が示された   | 「傾きの調節やしまうのがスムーズにできて嬉しかった。」     |

表4 区分別集計結果

| 区分   | 件数 | 割合(%) |
|------|----|-------|
| 理解深化 | 7  | 25.9  |
| 技能理解 | 6  | 22.2  |
| 職業理解 | 3  | 11.1  |
| 技能習得 | 2  | 7.4   |
| 志望形成 | 3  | 11.1  |
| 関心喚起 | 1  | 3.7   |
| 価値認識 | 3  | 11.1  |
| 協働理解 | 1  | 3.7   |
| 展示理解 | 1  | 3.7   |
| 合計   | 27 | 99.9  |

※割合は小数点第2位を四捨五入した。

### (3) 統計的傾向の分析

区分別集計の結果、「理解深化」が7件(25.9%)と最も高く、次いで「技能理解」が6件(22.2%)であった。このことから、本実践は博物館の機能および学芸員の役割に対する認識形成に加え、展示作業の具体的内容に関する理解を促進する効果を有していたことが確認された。また、「職業理解」「志望形成」「価値認識」はそれぞれ3件(11.1%)であり、博物館および学芸員職に対する職業的認識の形成および進路意識への影響も一定程度認められた。特に、「学芸員になりたいという考えも再燃してきた」等の記述は、本実践が職業選択意識に対して具体的な影響を及ぼしたことを示すものといえる。さらに、第2回の実習を中心に、「技能理解」および「技能習得」に関する記述が計8件(29.6%)確認され、実技を伴う体験学習が博物館活動に対する具体的理解を促進する上で有効であることが示唆された。一方、「関心喚起」「協働理解」「展示理解」についても少数ながら確認されており、本実践が博物館活動を多面的に理解する契機となったことが認められる。

### (4) 回次別比較

回次別にみると、第1回は主として講義形式であったことから、「理解深化」「志望形成」「価値認識」等の認知的理解および意識形成に関する記述が中心であった。これに対し、第2回は実習形式であったことから、「技能理解」「技能習得」「職業理解」に関する記述が増加しており、体験的学習が職業理解および技能認識の深化に寄与していることが確認された。このことは、講義による知識理解と実習による体験理解を組み合わせることが、博物館教育において効果的であることを示すものといえる。

### (5) 教育的効果の確認

以上の結果から、本実践においては以下の教育的効果が確認された。第一に、博物館の機能および役割に関する理解の深化である。学生は、博物館が単なる展示施設ではなく、資料収集・保存・調査研究・教育普及等の多様な機能を担う施設であることを理解した。第二に、学芸員の職務に関する具体的理解の形成である。展示制作、資料取扱、普及活動等の実務に対する理解が形成された。第三に、体験を通じた技能理解の形成である。掛軸展示等の実習を通じて、資料取扱および展示作業の技術的側面に対する理解が深まった。第四に、職業意識の形成である。学芸員職に対する関心の向上および志望形成が確認された。第五に、博物館の社会的価値に対する認識の形成である。博物館が地域文化の継承および発信において重要な役割を担う施設であることが認識された。

## (6) 結果の総括

本実践における感想文の分析からは、「理解深化」(25.9%)および「技能理解」(22.2%)を中心として、多様な教育的効果が確認された。特に、講義と実習を組み合わせた構成により、知識理解と体験理解の双方が促進されたことが明らかとなった。また、職業理解および志望形成に関する記述も一定数確認されており、本実践は博物館教育としての機能に加え、キャリア教育としての意義も有するものであると評価できる。以上のことから、本ワークショップは、博物館の機能理解、技能理解、職業理解および価値認識の形成に対して有効な教育的実践であったことが明らかとなった。

## 5. 考察

本実践において実施した講義および体験実習を通じて、参加学生の博物館および学芸員に対する理解の深化が確認された。特に、「理解深化」が25.9%と最も高い割合を示したことは、博物館の機能および役割についての基礎的認識が形成されたことを示すものである。感想文には、「美術館や水族館も博物館に含まれることを初めて知った」「博物館は地域の名刺代わりのような施設であることがわかった」等の記述が確認されており、博物館を単なる展示施設としてではなく、地域文化の保存および発信を担う総合的な文化機関として認識するに至ったことが明らかとなった。

また、第2回の体験実習においては、「技能理解」(22.2%)および「技能習得」(7.4%)に関する記述が多数確認された。掛軸の展示および収納といった具体的作業を体験することにより、展示制作が高度な技術および慎重な取扱を必要とする専門的業務であることへの理解が形成されたと考えられる。これは、講義のみでは得難い実践的理解が、体験学習によって補完されたことを示すものである。さらに、「職業理解」および「志望形成」に関する記述が計22.2%確認されたことは、本実践が職業意識の形成にも寄与したことを示している。特に、「学芸員になりたいという考えが再燃した」「資格取得を目指したい」といった記述は、本実践が参加学生の進路意識に対して具体的な影響を及ぼしたことを示唆するものである。以上のことから、本実践は、知識理解、技能理解、職業理解の三側面において教育的効果を有するものであったと評価できる。

### (1) 教育的意義

本実践の教育的意義は、第一に、博物館に対する認識の転換を促した点にある。実践前においては、博物館に対する理解は必ずしも十分とはいえなかったが、講義および実習を通じて、博物館が資料の収集・保存・調査研究・展示・教育普及等の多様な機能を担う総合的文化施設であることへの理解が形成された。第二に、体験的学習を通じた実践的理解の形成である。掛軸展示等の実習は、資料取扱の難しさおよび展示制作の専門性を具体的に理解する機会となった。これは、博物館活動を単なる知識としてではなく、実践的活動として理解する契機となったといえる。

第三に、職業理解およびキャリア形成への寄与である。本実践を通じて、学芸員の職務内容および社会的役割に対する理解が深まり、職業としての学芸員に対する関心および志望が形成された。これは、博物館教育がキャリア教育としての機能を有することを示すものである。第四に、郷土理解および地域意識の形成である。博物館が地域文化の継承および発信を担う施設であることへの認識が形成されたことは、地域への関心および郷土理解の促進に寄与するものである。以上のことから、本実践は、博物館理解、技能理解、職業理解および郷土理解の形成に寄与する、教育的に有効な実践であったと評価できる。

### (2) 新博物館構想への示唆

本実践の結果から、新たな博物館整備に向けて、いくつかの示唆が得られた。

第一に、体験型展示および参加型活動の重要性である。本実践において、実習を通じた理解が顕著に確認されたことは、来館者が主体的に関与する体験型展示が、博物館理解の促進に有効であることを示している。新博物館においては、資料に直接触れる体験や展示制作のプロセスを理解できるような参加型展示の導入が有効であると考えられる。

第二に、学芸員の活動を可視化する展示の必要性である。本実践において、学芸員の職務内容に対する理解が深まったことは、学芸員の活動を紹介することが博物館理解の促進に寄与することを示している。新博物館においては、展示制作の過程や資料管理の様子を紹介する展示の導入が望まれる。

第三に、教育普及機能の強化である。本実践のようなワークショップは、博物館理解および郷土理解の促進に有効であることが確認された。新博物館においては、学校教育と連携した教育普及活動を積極的に展開することが求められる。

第四に、地域との連携強化である。博物館は地域文化の継承および発信を担う拠点としての役割を有することから、地域住民および教育機関との連携を強化し、地域に開かれた博物館としての機能を充実させることが重要である。以上の点は、新博物館構想における展示計画および教育普及計画の検討に資する重要な示唆であるといえる。

## 6. 成果とまとめ

本研究は、青森県立郷土館におけるワークショップ実践を対象として、その教育的効果を参加学生の感想文の分析を通じて検討した実践報告である。分析の結果、本実践においては、博物館の機能および役割に関する理解の深化、展示制作に関する技能理解の形成、学芸員職に対する職業理解および志望形成、ならびに博物館の社会的価値に対する認識の形成が確認された。

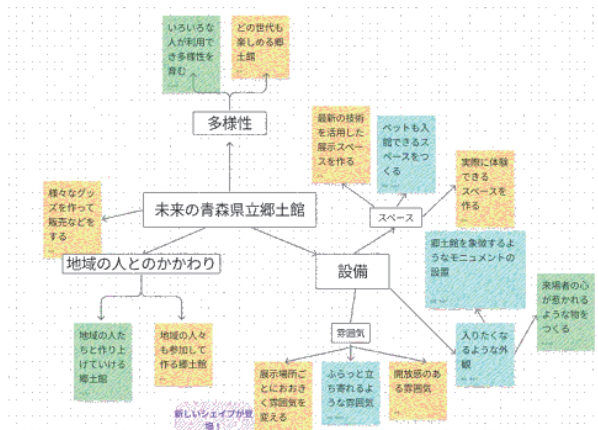
特に、講義による知識理解と実習による体験理解を組み合わせた構成は、博物館活動に対する多面的理解を促進する上で有効であったと評価できる。また、本実践は、博物館教育としての機能に加え、キャリア教育および郷土理解教育としての意義を有するものであることが明らかとなった。さらに、本実践の成果は、新博物館構想における展示計画および教育普及活動の検討に対して有用な示唆を与えるものである。特に、体験型展示の導入、学芸員活動の可視化、教育普及機能の強化および地域連携の推進は、新博物館の教育的機能を高める上で重要な要素であると考えられる。以上のことから、本実践は、博物館教育の有効性を示すとともに、今後の博物館整備および教育普及活動の方向性を検討する上で意義ある成果を示したものと結論づけられる。



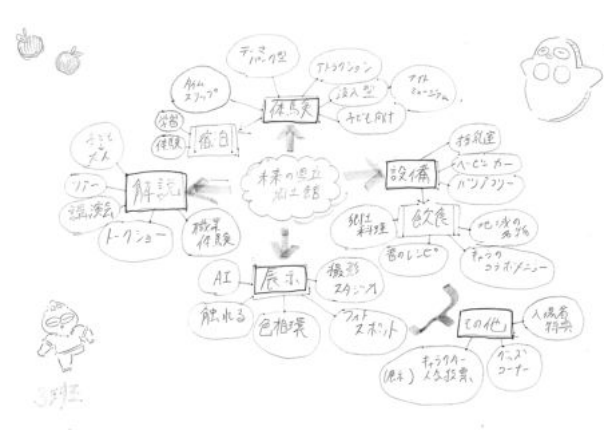
資料2 高校生が作成 マインドマップ①



資料3 高校生が作成 マインドマップ②



資料4 高校生が作成 マインドマップ③



資料5 高校生が作成 マインドマップ④

## 7. 「大学生が考える未来の県立郷土館」事業（報告）

青森県立郷土館では、令和7年7月、新博物館構想の検討に資する次世代の参考意見を収集することを目的として、「大学生が考える未来の県立郷土館」事業を実施した。本事業は、大学の学芸員養成課程を履修する学生および大学院生、ならびに博物館に関心を有する高校生を対象に、「これからの青森県立の博物館に望まれるものとは何か」をテーマとして、ワークショップ形式による意見交換を行うものである。

実施にあたっては、国立大学法人弘前大学（以下、弘前大学）に協力を依頼した。弘前大学は、当館協議会委員であり、同大学において博物館学講座を担当する葉山茂准教授（以下、葉山准教授）の所属機関であることから、本事業の趣旨に適した協力先であると判断したものである。依頼の結果、同大学より承諾を得て、本事業の実施に至った。

開催形態は、主催を青森県立郷土館、共催を弘前大学とし、会場は弘前大学総合教育棟の教室を使用した。参加者の募集は、弘前大学において学芸員養成課程を履修中、または履修を修了した学生および大学院生を対象として、葉山准教授の研究室を通じて行った。

当日の講義およびワークショップは、葉山准教授が中心となって佐々木あすか助教及び中村剛之氏もサポートしながら進行し、郷土館学芸員2名が補助および運営支援を担当した。参加者は提示された検討課題に基づき、グループごとに意見を出し合い、それらを整理・共有する形で議論を進めた。各参加者からは、青森県の博物館の将来像に関する多様な意見や提案が示され、活発な意見交換が行われた。

なお、本事業を通じて得られた意見および考察は、同年9月19日に開催された第4回青森県立郷土館整備検討会議<sup>1</sup>において紹介され、新博物館構想を検討する上での参考資料の一つとして活用された。

なお、本事業の概要および実施要項については、資料2に示したとおりである。

## 資料6 令和7年度「大学生が考える未来の県立郷土館」事業開催要項

### 1 趣旨

本事業は、青森県立郷土館の新博物館構想に向けて次世代の意見を収集することを目的とし、学芸員養成課程を履修する学生および履修を修了した学生・大学院生を対象として実施するものである。「これからの青森県立の博物館に望まれるものとは何か」をテーマに、意見交換等を行うワークショップ形式の講義を開催する。

### 2 主催 青森県立郷土館

### 3 共催 国立大学法人弘前大学

### 4 開催日 令和7年7月12日(土)

### 5 場所 国立大学法人弘前大学 人文社会学部棟または総合教育棟教室

### 6 日程

13:00～14:15 講義1

(郷土館の趣旨説明、青森県の課題と青森県に望まれること)

14:15～14:30 休憩

14:30～16:00 講義2

(郷土館をどのような博物館にしたいのか、まとめ)

### 7 対象

国立大学法人弘前大学において学芸員養成課程を履修中、または履修を修了した学生・大学院生の希望者

### 8 講師

国立大学法人弘前大学人文社会学部 准教授 葉山 茂

青森県立郷土館 主任研究主査 中沢 秀一(教育普及分野担当)

青森県立郷土館 主任学芸主査 伊丸岡 政彦(教育普及分野担当)

### 9 参加者(教職員等)

国立大学法人弘前大学人文社会学部 助教 佐々木あすか

国立大学法人弘前大学農学生命科学部・白神研究センター 教授 中村 剛之

青森県立郷土館 副館長 島口 天

青森県立郷土館 学芸課長 小山 隆秀

### 10 その他

- (1) 事業の実施にあたっては、弘前大学人文社会学部の葉山茂准教授と協議の上、学芸員養成課程を履修中または履修を修了した学生・大学院生に参加を呼びかけた。
- (2) 講義およびワークショップは葉山准教授が主として進行し、青森県立郷土館学芸員中沢および伊丸岡が補佐・支援を行った。
- (3) 講義当日に使用する文具類および学生募集に係る広報物の作成については、青森県立郷土館が負担した。
- (4) 本事業の成果は、青森県立郷土館整備計画検討会議および県教育長に対し、次世代の意見として紹介した。

11 講義計画案

| 回数・日時                          | 講義項目   | ねらい  |
|--------------------------------|--|--|
| 講義1<br>7月12日(土)<br>13:00～14:15 | 「大学生が考える未来の県立郷土館①」<br>・青森県立郷土館から主旨・現状説明(副館長・中沢)<br>・講義(ワークショップ形式)<br>テーマ:「青森県の課題と青森県に望むこと」 | 青森県の実態や課題・現状について考えることで、危機感や問題意識を共有し、それを解決する一助としての総合博物館である郷土館の役割について繋げることができる。    |
| 講義2<br>7月12日(土)<br>14:30～16:00 | 「大学生が考える未来の県立郷土館②」<br>・講義(ワークショップ形式)<br>テーマ:「青森県立郷土館をどうい博物館にしたいか」<br>・青森県立郷土館からお礼(副館長)     | 青森県の実態や課題・現状について考えることで、危機感や問題意識を共有し、それを解決する一助としての総合博物館である郷土館の役割・構想について考えることができる。 |

8. 開催当日について

本事業は、「これからの県立の博物館に望まれるものとは何か」をテーマとして、参加者による意見交換を中心としたワークショップ形式の講義として実施した。

(1) 対象者

国立大学法人弘前大学において学芸員養成課程を履修する学生および大学院生(参加者20名)

(2) 開催日時

令和7年7月12日(土) 13時00分～16時00分(90分授業2コマ相当)

(3) 開催場所

国立大学法人弘前大学 総合教育棟教室(青森県弘前市)

(4) 当日の流れ

①情報提供

青森県立郷土館から、本事業開催の趣旨および郷土館を取り巻く現状について説明を行った。

弘前大学の教員3名により、国内博物館における先進的な取組事例と、その成果および背景となる考え方について紹介が行われた。

②講義(ワークショップ)

以下に示す検討課題①～⑦について、学生同士で議論を行い、それらを踏まえた⑧において各自の考えを整理・共有した。

③青森県の現状分析

(経済、産業、文化、社会、政治、地理など、青森県が現在抱える諸課題について)

④青森県の博物館が抱える課題

博物館において期待される分野のカバー範囲と分野間の関係(分野の連携のあり方、展示表現の方法等)

⑤期待される博物館と市民との関わり方(利用方法、想定される対象者を含む)

⑥県内外の諸機関との連携のあり方(博物館、図書館、公民館、行政、民間企業、大学、小・中・高等学校等)

⑦および東北地方における博物館の位置づけ

⑧新しい博物館における具体的テーマ(青森県の現状分析を踏まえたもの)

⑨これまでの議論を踏まえた、新しい博物館に期待されるコンセプト

⑩まとめ

9. 当日使用ワークシート(学生意見)の集計

(1) 検討課題1-1

青森県の現状分析(青森県が現在解決すべき諸問題)

表5 青森県の現状に関する主な意見(複数回答)

| 分類          | 主な内容                         | 人数 |
|-------------|------------------------------|----|
| 鉄道アクセス・インフラ | 鉄道本数の少なさ、天候による遅延、新青森駅・弘前駅の課題 | 18 |
| 費用・予算の不足    | 政策・教育分野への予算不足                | 7  |
| 人口減少・少子化    | 伝統芸能の継承危機、定住人口・リピーター不足       | 20 |

|          |                          |    |
|----------|--------------------------|----|
| 産業の不安定   | 雇用不足、最低賃金の低さ、農林水産業への影響   | 20 |
| 情報発信力の弱さ | 広報不足、発信のパターン化、イベントの継続性不足 | 7  |
| 地域性・県民性  | 自己評価の低さ、文化的分断            | 3  |
| 生活環境     | 雪害対策、環境破壊への懸念            | 11 |
| 学習環境     | 教員不足、学ぶ場の減少              | 7  |

分析結果

提出されたワークシート 20 名全員が、人口減少・少子化および産業の不安定さを青森県の根本的課題として挙げている。これに加え、鉄道アクセスの脆弱さや生活環境、教育・予算面の課題、情報発信力の弱さなど、社会構造全体に関わる多角的な問題が指摘されていた。

(2) 検討課題 1 - 2

青森県の博物館の課題

表 6 青森県内博物館に対する課題認識

| 分類    | 主な内容                       | 人数 |
|-------|----------------------------|----|
| 分野の偏り | 考古分野中心、自然史・民俗分野の不足・環境研究の不足 | 20 |
| 展示手法  | 体験型展示の不足、分野間の分断            | 18 |
| アクセス  | 立地条件、公共交通の不便さ              | 14 |
| 館名の問題 | 「郷土館」名称によるイメージの限定          | 10 |
| 集客重視  | 一過性展示、県民リピーター不足            | 6  |
| 収蔵庫不足 | 資料保管スペースの限界                | 5  |
| 行政支援  | 補助金・支援体制の不足                | 5  |
| 利用体制  | 教育的活用の不明瞭さ                 | 3  |
| 研究紀要  | 研究成果の見えにくさ                 | 3  |
| その他   | 美術館との差別化、大学連携              | 少数 |

分析結果

全員が分野構成の偏りを最大の課題として挙げており、特に自然史・民俗・環境研究の不足が顕著であった。加えて、展示手法やアクセス、館名の印象といった、利用者視点からの課題が多く指摘されていた。

(3) 検討課題 2 - 1

期待される分野構成とその連携

表 7 期待される展示分野と連携の方向性

| 分類       | 主な内容           | 人数 |
|----------|----------------|----|
| 自然と文化の融合 | 自然史×考古・民俗、文理融合 | 20 |
| 食文化      | 歴史的視点・体験型展示    | 6  |
| 美術分野     | 近現代美術、社会課題提起   | 7  |
| 教育連携     | 学校教材・学芸員との交流   | 4  |
| 伝統芸能     | 体験・対話型展示       | 5  |
| 新技術活用    | VR 等による展示更新    | 3  |

分析結果

自然と人間活動を横断的に捉える展示構成への期待が非常に高く、文理融合型の総合展示が新博物館の核となる可能性が示唆された。

## (4) 検討課題 2-2

博物館と市民との関わり方

表 8 市民参加・利用形態に関する意見

| 分類       | 内容              | 人数 |
|----------|-----------------|----|
| 参加しやすさ   | 親子利用、バリアフリー、体験型 | 16 |
| 職員との交流   | 学芸員への質問・対話      | 12 |
| バックヤード公開 | 裏側の見える化         | 10 |
| 市民参加     | 展示準備、ボランティア     | 少数 |
| その他      | 学生発表、街全体博物館構想   | 少数 |

## 分析結果

博物館を「参加できる学びの場」として位置づける意見が多く、職員との直接的な関わりやバックヤード公開が、理解促進に有効であると捉えられていた。

## (5) 検討課題 2-3

諸機関との連携と広域的位置づけ

表 9 連携対象とその内容

| 連携先     | 内容           | 人数 |
|---------|--------------|----|
| 公的機関    | 図書館展示、学校教育連携 | 12 |
| 学芸員業務公開 | 職業理解         | 7  |
| 出張展示    | 学校・地域への展開    | 7  |
| 企業      | 展示・イベント協力    | 5  |
| 博物館同士   | 資料・展示連携      | 5  |
| その他     | 大学連携、寄付      | 少数 |

## 分析結果

子供の時から遠足などで出かけたり、図書館に埋蔵文化財の紹介と合わせて関連書籍を展示したりするという意見が12名で一番多く、学芸員の仕事内容を公開する、出張展示などをして実際に博物館の利用の仕方を知ってもらうという意見が各7名、その他企業との連携や博物館同士の連携、知りたい情報などがすぐに調べられるように資料を学校に置いておくなどという、他の機関や博物館との連携を重視する意見が出ていた。

## (6) 検討課題 2-4

新しい博物館の具体的なテーマ

表 10 新博物館に期待されるテーマ

| テーマ   | 内容            | 人数 |
|-------|---------------|----|
| 総合博物館 | 地域別構成で青森全体を理解 | 9  |
| 世代横断  | 長期的に通える博物館    | 6  |
| 体験型   | 伝統工業・生活体験     | 6  |
| 環境・食  | 自然保全と文化       | 少数 |

## 分析結果

一番多かったのは、津軽地方や南部地方、市区町村など地域別の生活を知る場として展示をして、そこにいけば青森県がすべてわかるといった総合博物館という意見が9名、伝統工業などを体験できたり、暮らしの過去と現在・未来へつなげていく、世代を越えてだれでも利用できる博物館が6名、その他環境保全や食・自然保護を通してそこで発展した文化の展示や食を学べる施設の設置という意見もあげられた。

検討課題 2 - 5

新しい博物館に期待されるコンセプト

表 11 博物館運営に関する基本コンセプト

| コンセプト   | 内容           | 人数 |
|---------|--------------|----|
| 過去から未来へ | 課題解決型・更新型博物館 | 9  |
| 学びを楽しむ  | 体験・遊びを通じた学習  | 6  |
| 総合理解    | 青森県のすべてを体験   | 4  |
| 研究・教育   | 調査・教育拠点      | 少数 |

参考意見(自由記述より)

自由記述では、「誰でも利用できる博物館」「世代を越えて通い続けられる場所」「更新され続ける辞書としての博物館」など、博物館を固定的な展示空間ではなく、社会とともに変化する知的拠点として捉える視点が多く見られた。



写真 18 当館副館長あいさつ



写真 19 県立郷土館現状説明



写真 20 葉山準教授による先進館の事例紹介



写真 21 ワークショップ講義様子①



写真 22 ワークショップ講義様子②



写真 23 ワークショップ講義様子③  
(いずれも弘前大学において)

10. 成果とまとめ

令和7年度に開催された全6回の青森県立郷土館整備検討会議においては、将来的に全面リニューアルオープンが予定されている当館の方向性について議論が行われた。今回実施した「大学生が考える未来の県立郷土館」事業において学生たちが議論し、取りまとめた意見は、令和7年9月19日に開催された第4回青森県立郷土館整備検討会議の場で紹介され、郷土館の将来像を検討するための一助となった。

本事業を通じて、日本の将来を担う若い世代の視点や価値観を、当館の整備構想検討の参考意見として聴取する機会を得ることができた点は、当館にとって大きな成果であったと評価できる。特に、博物館を「更新され続ける場」「市民とともに考え、学ぶ場」として捉える意見は、今後の博物館運営を考える上で重要な示唆を与えるものであった。

令和8年度以降は、整備計画の具体化とともに、それに基づく施設整備や工事が段階的に進められていくことが想定される。今後、教育普及分野担当として、本事業で得られた成果を踏まえつつ、当館の諸事業において同様の役割を果たしていくことが求められる。そのためにも、社会状況や利用者ニーズの変化に柔軟に対応しながら、引き続き研鑽を重ねていきたい。

## 11. おわりに

本実践は、将来的な青森県立郷土館の整備構想を見据え、高校生・大学生を対象として博物館の機能および役割について主体的に考察する機会を提供したものである。本稿では、ブレインストーミング、KJ法およびマインドマップの作成を通じた実践の過程とその成果を整理し、教育的意義および新博物館構想への参考意見について検討した。

その結果、本実践は、学生の主体的思考および協働的学習を促進するとともに、博物館を展示施設としてのみならず、学習支援、情報発信および地域連携等の多様な機能を有する社会的文化施設として理解する契機となった。また、学生から示された多様な意見は、利用者の視点に基づく博物館像を具体的に示すものであり、今後の博物館整備を検討する上で有用な基礎資料となるものである。本研究は一実践事例の報告であり、その成果の適用範囲については慎重な検討が必要であるが、高校・大学と博物館の連携による教育実践が、学生の学習効果の向上と博物館の将来構想の検討の双方に寄与し得ることを示した点において意義を有するものと考えられる。今後は、本実践で得られた知見を踏まえ、より多様な対象を含めた継続的な実践を行っていきたい。本稿が、青森県立郷土館の今後の整備および博物館教育の発展に資する基礎的資料となることを期待して、本稿の結びとする。

## 参考文献

- 神康夫・小山隆秀・中沢秀一 2022 オンライン会議システムを活用した博物館の試み 青森県立郷土館研究紀要  
第46号 青森県立郷土館 葉山 茂 2025 第4回青森県立郷土館整備検討会議 参考資料案